〔新撰六帖二〕冬の野　行實

冬野にはこがら山がらとびちりてまた色々の草のはらかな

〔山家集下〕ことりどものうたよみける中に

ならびゐてともをはなれぬこがらめのねぐらにたのむゑひの下枝

〔拾玉集四〕詠百首和歌　春二十首

春きてもみよかし人の山ざとにこがらむれゐる梅のたちえを

〔土御門院御集〕鳥名十首

み山べの嵐にうつるこがらめは時雨にのこる木のはとぞみる

〔運歩色葉集鳥名〕鵠（ヒガラ）

〔饅頭屋本節用集比生類〕鵠（ヒガラ）

〔倭訓栞前編二十五比〕ひがら　小鳥の名にもいへり、其眼の瞟なるをもて也、鵠鵠也といへり、鵠字をよめるは心得がたし、

〔本朝食鑑六林禽〕日鵲

訓比加良、名義不詳、或曰火雀（ヒガラ）、以色赤而稱、此亦不爲當矣、狀似四十雀而小、頭背灰赤色、眼頰白黑相交、腹白翅尾黑、聲亦似三雀、其味尚不佳、

〔喚子鳥上〕ひがら　ふがい　生ふ壹匁、あをみ入、粉壹匁、くるみ入、

大きさ小がらにちいさし、毛色白くろねずみまじり、四十からにたり、さゑづり少し有、ちいさく玄ほらしき鳥なり、山がらのごとく中がへりするも有物なり、

〔喚子鳥下〕粒餌小鳥の分　何にても水を入る

あいせんがら　ふがひ　山がら同斷○くるみ、ふのごま、花のみ、何れも水入、すりふは生ふ八分、粉壹匁、あをみ入、

鵠

愛染柄